

曾野綾子

天上の青

上

天上の青



曾野綾子

毎日新聞社

てんじょう あお
天上の青 上

1990年 9 月 20 日 第1刷

1990年 10 月 30 日 第17刷

著 者 曽 の あや こ
 曾 野 綾 子

編集人 沢 晶 毅

発行人 川 合 多喜夫

発行所 毎 日 新 聞 社

☎ 100-51 東京都千代田区一ツ橋

☎ 530 大 阪 市 北 区 堂 島

☎ 802 北九州市小倉北区紺屋町

☎ 450 名古屋市中村区名駅

印刷・製本／中央精版

©Ayako Sono Printed in Japan 1990

ISBN4-620-10419-1

目次

第一章	朝陽の中から	5
第二章	遠出	24
第三章	屋上の変質者	43
第四章	なだれた時計	69
第五章	いぶりだし	87
第六章	反攻	120
第七章	春の凍土	154
第八章	或る遭難	191
第九章	飾り窓の女	210
第十章	おだまき	230
第十一章	第二楽章	265
第十二章	半人間	299

装帧
菊地信義

天上の青上

第一章 朝陽の中から

その男は、道の向こう側から、煙っている朝陽の中を、垣根の傍にしゃがみこんで朝顔の手入れをしていた波多雪子の方へ、道を斜めに横切って歩いて来た。

一瞬、雪子は緊張で息を潜めた。それは自分でも意外な反応であった。男はただ、道のこちら側を歩きたくなって渡って来ただけなのかもしれない。別に自分をめがけてやって来ると考えねばならない理由は少しもなかった。

雪子の家の道を隔てた西側は、まだ田圃であつた。この湘南の海の近くの土地では、昔からの農家の生活と、都会から安い住宅地を求めて移り住んだサラリーマン人種の暮らしとが、あまりしっくりとは言えない状態で混ざり合っている。

男は——三十を少し越しているように見えた。もしかすると三十五にはなっているかもしれない。死んだ弟がもし生きていると、こんな年になっているはずだ、と考えたのは、男が眉の濃い優しい整った顔立ちをしていて、それがどことなく六十歳で死んだ父の面影とも似ていたからかもしれない。

男は「まっすぐ斜めに」道を横切ると、雪子が垣根の内側にいることを知ってか知らずか、一メートルほど離れた所で、朝顔の花を見るために立ち止まった。

「きれいな青だなあ」

朝顔は、確かに男の眼を惹くだけの特異な花の着け方をしていた。それは、その場所にあつて枯れてしまった三メートルほどの高さの木に絡まって這い上がっていたので、木全体を鮮やかなブルーの花で飾っていた。しかし男が、そう口に出して言ったのは、明らかに植え込みの蔭の雪子の存在を知っていたからだだった。

「この朝顔、何て名前なんです？」

雪子は軽い当惑を覚えながら立ち上がった。ほんとうは人に会いたくなかった。パーマメントをかけていない髪は、きちんと束ねていない限り、いつでもざんばら髪ふうなのだが、今日はまだ起き抜けで、櫛さえも通していない。

「『ヘンリー・ブルー』っていうんです」

「横文字の意味はわからないけど」

男はのんきそうな口調で言った。

「『天上の青』っていうような意味だそうです」

「朝顔って、こういう色と形じゃなきゃいけないよね。最近、変に小細工したみたいなのがあるでしよう。花びらがよじれてたり、白い斑があったり、牡丹としか思えないのがあったりね。ああいうの好かないな」

「白い筋が車輪みたいに入っただのは、曜白咲き、って言うんです」

「こういう字書くのかわからないけど……とにかくこの花の色はいいよ」

「安いんですよ、この種は。他の、桔梗^{ききよう}咲きとか曜白咲きなんかの種だったら、一袋二百円ですけど、これは、百五十円しかしませんから」

男は微^{かす}かに笑ったように雪子は感じたが、それは決して不愉快なものではなかった。

「植物がお好きなんですか？」

「好きということもないんだけど、前ちょっと、友達がやってる仕事を手伝わされたことがあるから」

男は遠い昔をふてくされながら思い出したように語ったが、その表情はむしろ楽しそうであった。

「しかし朝顔を枯木に絡みつかせるってアイディアはおもしろいな。普通、行灯^{あんどん}じたとか、垣根に這わすとかするだけだから」

この人は勤めがないんだろうか。こんな道草を食っていて、出勤時間に遅れないんだろうか、と雪子は少し気になった。

「いつか、雑誌を見たんです。外国の風景でした。イタリアだったか、イスラエルだったかもしれません。大きな椰子^{やし}の木の胴体のところに、みごとなブーゲンヴィリアが絡みついてました。椰子の幹の部分が、緋色^{ひいろ}の絨緞^{じゆうとん}を巻きつけたみたいになってました。おもしろいアイディアだと思って、早速真似してみたんですけど、木が小さいし……でも、朝顔では、これでもやっとなでした」

「種を取るんでしょう？ この朝顔」

「ええ」

「種を取っておいて少しくれないかなあ。来年、播^まいてみたいんだ。種が取れた頃、また、来ますから」

「どうぞ。こんなのでよろしかったら」

「ほんとうは、毎年新しい種を種屋からお買いになった方が いい花が見られますよ。こんな平凡な朝顔なら、どこでも種は手に入りますから」と言う方が親切だと思ひながら、雪子は男の言うことに頷いていた。すると男は淡いブルーのポロシャツの下、しっかりと筋肉の発達した腕を上げて「じゃあ」と笑顔を見せながら歩き去った。

一体、どういう用事があつて、あの人はこんなあまり人通りもない道を歩いていたのだろう。雪子の家は、二百メートルと離れていないところに磯部小学校があるから、普段はそれほど淋しいところでもない。今は夏休みだから静かだが、普段の朝は、蟻の這うように続いている子供の列が、十メートルほど離れた北側の細い道を、がやがや喋りながら通つて行く。風向きによつては、校内放送の声や音楽もけっこう喧しい。

子供たちのほとんどは、バス通りの方角から来るのである。バス停留所も「磯部」で、乗り降りする人も昼間はごく稀にしかなくて閑散としたものだが、それでもバス通りには「信濃」という蕎麦屋、田中薬局、それと「コーヒー白帆」と看板に書かれたまま久しく開けられたことのない喫茶店の、残骸と言いたいほど荒れ果てた建物が並んでいる。いくら夏には東京からの車が、三浦半島をぐるりと一周するほど入るとは言つても、景色もよくないこんな街道沿いで、喫茶店が成り立つわけもないのである。

しかし西側の田圃の向こうは、海まで二、三キロ、ずっと人家はなかった。そこは電鉄会社が埋め立てたまま放置してある広大な荒れ地である。先行き、ディズニールランドのようなものが造られるとか、造成して会員制のヨットハーバーができるとかいう噂もあるが、誰もはっきりした計画は知らない。その向こうの海は相模湾である。風にだけ時々、潮の香りがし、カモメが飛ぶのが見える。

「雪ちゃん！」

家の方から呼ぶ声がして、雪子は氣を取り直した。

「今、行きまあす」

庭先の雪子と呼んだのは、二つ年下の妹の智子^{ちこ}であった。とは言っても誰もが、言われなければ二人を姉妹とは思わなかったし、そう説明されても智子の方を姉だと思ふ人の方が多かった。姉妹がお互いを、「智ちゃん」「雪ちゃん」と呼び合っていたので、上下關係を推測できなかったこともある。二人共、三十八歳と三十六歳になった今日まで独身であった。ほんとうはその下に、博文^{ひろふみ}という弟がいたのだが、今から五年前、穂高に登る途中、まだ二十五歳で、心筋梗塞^{しんきんこうそく}で急死したのである。

智子は母に似て、顎^{あご}が張った四角い顔をしている。色も浅黒くて、二重瞼^{まぶた}の眼がくつきりと大きかった。しかし雪子は強^しいて言えば父方の祖母とそっくりだと言われていた。色白の卵型の顔で、眼も一重瞼なので大きく見せようもない。しかし近視をコンタクトレンズで矯正している妹の智子と違って、いい視力であった。

雪子が独身でもどうやら食べて来られたのは、和裁の腕があるからであった。十年近く税務事務所に勤めていたのだが、人中で働くのがどうしても性に合わない上、もともと手仕事が好きだったので、うちで和裁の仕事だけをするようになったのが、弟の死の直後である。

妹の智子は、反対に、一日として家にいられない性格であった。智子は共学の私大を出て、すぐ雑誌社に勤めたが、こちらは仕事に性格に合っていたようで、今も男と同じようにマスコミの中で働いている。

智子は大分前から、都内に、小さなワンルームマンションを持っていた。週のうち、三晩はそこへ泊まっている。だから、品川から京浜急行で一時間と少しかかるこの海辺の家に帰る時は、単身赴任の男が家に帰って来る時と同じであった。

ほとんど徹夜に近い校了明けの朝など、智子は印刷所からタクシーを飛ばして六時か七時頃に帰って来る。事前に電話があるので、雪子は風呂を用意して待っていた。朝飯にウイスキーの水割りをはいほど飲んで寝る。午後四時頃起きると、もう一度風呂に入り、それから初めて姉妹は差し向かいで、久し振りのゆっくりした夕食を食べた。

家事全般、家の管理全般が雪子の仕事であった。

六年ほど前、姉妹は横須賀の母の家から離れて、二人でここに家を持ったのである。父の死後、母は再婚していたので、姉妹が家を出た時期としては、遅すぎるくらいであった。ここは東京までの通勤の距離は遠いが、まだ地価は安かったし、幸いにもマスコミは朝が遅い。ラッシュアワールの通勤をしなくて済むし、駅が終点なので、いつも始発電車ですべて本を読んで行ける利点もある。雪子も僅かの貯金の中から頭金を出し、それに、智子の貯金も加えて、足りないところは智子がローンを引き受けている。家を買った時点で、姉妹は将来も常識的な形をとった結婚はしないという見極めをつけていたのかも知れなかった。

昨夜智子は、いつもと同じように夜九時頃帰宅した。

「おはよう。早かったのね」

庭から家に入ると、雪子は手を洗いながら妹に言った。返事の代わりに、智子がCDでワグナーのオペラ「パルジファル」をかけ始めたのが聞こえた。

雪子は妹の智子と違って、オペラはもちろんクラシックの音楽になど、全く興味を持っていなかった。CDの音質はきれいだが、正直なところ今でも、重々しいワグナーなどかけられると、煩いと思う時が多かった。しかし一家の稼ぎ手は智子である。一家の経済を支える夫が威張るように、智子が多少自分勝手でも仕方がない、と雪子も思っている。

「何を食べる？」

雪子は妹に尋ねた。

「また、オートミールでいい」

智子の食事の趣味はいつもかなり偏^{かたよ}っていた。オートミールを食べるとなったら、二、三週間そればかり食べ続ける。しかし、オートミールは簡単なよう^{よう}でいて気むずかしい食物であった。心をこめて塩加減に注意しないと、てきめん^{めん}にまずくなる。

「今日も、昨日くらいには帰れる？」

オートミールは大して好きではないのだが、妹に付き合^あって自分も同じ中身のボウルを前に置きながら、雪子は尋ねた。

「わからない」

それ以上は聞かないことになっていた。実際、原稿を貰^{もら}う作家の中には、夜半近くに取りに来てくれというのもあるし、渡すと言^いっておいてどこかへ雲^{くも}がくれしてしま^まうのもあるという。

智子自身の生活も、文字通り自由なものであった。夜は飲みに行く時もあるし、急に徹夜の麻雀に誘^よわれることもある。自分のマンションに泊^とまったようなことを言^いっているが、実はそうでない場合も今までに何度もあった。智子には気の合^あった男が何人かいる。会^あいたいと思^{おも}えば、相手の家に行くこともあるし、仕事が終わ^わってから、箱根や湯河原くらいの近い温泉なら、車を飛ば^として一晚を一緒に過^{すご}しに行くこともできる。だから淋^{さび}しくないのだ。雪子は妹の生き方を、口には出さなかつたが、積極^{きふ}的に肯定^{きやうてい}しているつもりだ^たった。

男と会うほどの時間^{じかん}が取れない時、智子の心を癒^いやしてくれるのが音楽^{おんがく}なのだ。忙しい無我夢中^{むがむちゅう}の一日^{いちにち}が過ぎると、夕方^{ゆふがた}になって取り戻^{もど}して来^きた自分の心と神経^{しんけい}は、埃^{ほこり}を被^{おほ}って、ささくれだ^{ささくれだ}っている

のがわかるような気がするらしい。手が汚れているなら、温かいお湯でさっぱり洗い流し、それだけで疲れが少しは取れたようにも思えるものだが、荒れた心や神経は風呂に入れて疲れをほぐしてやることもできない。その時、不思議と音楽を聴くと、その荒れた埃っぽさが治る、と智子は言ったことがある。

「朝顔が今一番きれいなよ」

オートミールを食べながら雪子は妹に言った。

「そう?」

当然そこで、「今、外から褒めてくれた人がいたわ」と話すつもりだったのに、智子が話に乗って来ないので、雪子は口をつぐんだ。智子の方から「さっき誰かと喋ってた?」と聞きでもしたら、早速あの男のことを話そうと思っていたのだった。

「昨日は大変だったのよ」

智子は朝顔のことなど、眼中にない調子で言った。

「うちの編集部の子が、電車の中に取ってきたばかりの原稿忘れて来たの」

雪子は妹の智子に代わって息を詰めた。

「何枚?」

「三十枚ほど」

智子はこともなげに言った。

「出て来た?」

「それがお金でも美術品でもないものなのに、出てこないのよ。拾った人だって、何の役にも立ちやしないのにな」

「どうするつもり？」

「大丈夫なのよ。ワープロのコピーなんだから」

「なあんだ、生原稿かと思ったわ。じゃ、事情を話して、もう一度、コピーを打ち出してもらえばいいんじゃない？」

「そうなんだけど、相手がそういう簡単な人じゃないからね。『コピーだからなくしてもいいってもんじゃない。そういう編集部に、安心して仕事をやるわけにはいかない』って、こうだから」

「どうして、『ああ、そうですか。大丈夫ですよ。オリジナルはうちの機械の中にあるんだから、心配しなくていいですよ』って言えないのかしら」

「ばかだからね。ばかほど、威張るのよ」

「それで謝りに行って来たの？」

「編集長がね」

「お気の毒に」

「ううん、あの人も調子がいいだけで、しみとおらない人だから、平気なのよ」

「智子はそう言うてから、

「あ、雪ちゃん、済まないけど、今日、オペラの切符のお金、払い込んでおいてくれない？　ここに十八万円あるから。二人分、三回通しのS席の切符買ったもんでね」

と言った。

「いいわよ」

煙草をくわえたまま、眉間に皺しわを寄せて札を数える妹の、化粧っ気もないきつい表情を眺めながら、雪子はこっそり驚いていた。誰と行くのかわからないが、二人分を智子が全部払ってやるのか、それ

とも、半分は立て替えるだけなのか。半分としても切符代とは思えない額だと雪子は感じたのであった。

「いつなの？」

「十月の末から、十一月初めにかけて三回あるのよ。もう売出しの日にほとんど売り切れちゃうんだから」

「十一月ね」

この暑さの中で、と雪子は思った。夏休みが終わり、残暑がじりじりと照りつけると、まもなく雪子の仕事は忙しくなる。まず七五三、それから結婚式や、年末年始にかけての行事のための晴着の注文が増えるのである。

その秋までに、あの男はほんとうに朝顔の種を取りに来るだろうか、と雪子は考えた。あの男が今度来たら、植物が好きそうだから、もっとよく庭を案内することになるかもしれない。雪子はそれを秘密の計画のように考えたが、それは、決して実現しない期待のようにも思えた。

朝顔の種を採集した時も、雪子はあの男のことを思い出していた。あれ以後、道路の方を見る度に、あの男がいそうな気がしている。しかし姿を見かけたことはなかった。

東京からの釣り師だったのだろうか、と雪子は想像した。三浦半島の海は、もう釣り場としてはあまりよくない、と言っている人もいるが、それでもけっこう客は押し寄せている。しかし、あの姿はどう見ても釣り師とは思われなかった。

採集した種は半分に分けて、二つの封筒に入れた。男に半分渡し、残りを自分の家で播くつもりである。特徴のない包みだから、何か印をしておかなければ、うっかりするとほかの紙屑と一緒に捨て